



●詩經から巴金

中国文学館

●大修館書店刊

一提起李白
便令人聯想到酒
這和同時代的杜
甫所写的那首具
有現實感的「飲中
八仙歌」大有關
係。的確李白愛
酒之点、不在陶
淵明之下、所写
的与酒有関的詩
也為数甚多。



黎波 著

詩經から巴金

中国文学館

●詩經から金
黎波 著 ●大正十三年刊

車遅國猴王顯法



序説

留保することなく、中国文学は、中国人によって中国語で書かれた約三千年のあいだの文学と定義できる。

中国人とは、歴史時代に入る前から、二十世紀の今日にいたる時間のなかで、黄河と揚子江の両流域を中心とする空間に居住する人間のことをいい、秦代以前の諸々の国、すなわち斉の人も楚の人も中国人であるのはもちろんのこと、モンゴル民族の元王朝の、漢民族の明王朝の、満民族の清王朝の、そして、そのあとの中華民国の、中華人民共和国の人間も、おしなべて中国人ということであり、また五十六をかぞえる少数民族も、さらに海外同胞も、すべて中国人の仲間にはいる。

中国文学とは、これらの中国人の手によって制作された、また制作される文学のことである。多民族国家の中国においては、当然のことながら少数民族も中国文学の制作に参与する。撒^サ尼族の叙事詩「阿詩瑪」、白族の伝説「望夫雲」、傣族の伝説「娥并与桑洛」、チベット族の英雄史詩「格薩爾王伝」、侗族の民話「珠郎与娘美」、壮族の民話「百鳥衣」、モンゴル族の叙事詩「嘎達



梅林」、高山族の神話物語「日月潭」、僮僮族の「逃婚調」などの作品がある。にもかかわらず、中国文学は漢民族文学の同義語であると言ひ切れるのは、作品の豊富さ、多彩さ、結晶度の高さ、ジャンルの多様性、歴史の長さなどの諸点で他を決定的に引きはなしているからである。

中国語とは即ち漢民族の共通語で、こんにちいうところの漢語のことである。北京語を発音の基準にし、北方語を基礎として規範化したこの現代漢語こそ、現代中国の文学言語である。この現代漢語の先祖は三千年前にすでに文字をもったほどに成熟し、またこの言葉を使用する人口は世界屈指といわれ、約十億の人間がこの言葉を話し、この文字でものを書いているのである。語義や字体の変遷があったにせよ、中国文学は古代からずっとこの言語とこの言語を表記する文字で制作されたのである。

およそ三千年の歴史をもつ中国文学を、一応八つの時期に分けることが可能である。『詩経』『楚辞』の先秦時代、『史記』と五言詩の漢代と、陶淵明、志人志怪の南北朝時代をくめるめた漢魏六朝、詩と伝奇の唐代、詩、詞と話本の宋代、雜劇の元代、長篇小説の明代、長篇小説の清代、現代文学の展開、という具合になる。ギリシヤ文学の場合はどうか。紀元前六世紀までを前古典期とし、叙事詩と抒情詩の時代とする。前五世紀から前四世紀までを古典期とし、前半はアッティカの劇、後半は散文である。前三世紀から一世紀までをヘレニズムの時代とし、学者、文人の詩と散文とする。最後に紀元後一世紀から五世紀をローマ時代として、ヘレニズムの延長とみる。このように文学の性質に基づいて分期し得たのは、ギリシヤ文学においては次々に新しい文学の種類が完成されたことによるのである。ゆるやかなカーブをえがきつつ迂



回するアジア的生産様式ともいふべき中国文学の歩みをとらえようとする場合、王朝依存の分期方式をとるのも無理からぬことと思われる。が、政治史上のかわり目が必ずしも文学史上のかわり目に一致しないという事情はいかんともし難い。

中国文学史は、普通その第一頁に、先秦時代から記述しはじめる。秦は言うまでもなくあの文献焼却、知識人生き埋めで名高い始皇帝統治の文学不毛の王朝のことで、秦の上に「先」をつけると、秦王朝成立以前、つまり春秋戦国を中心として考える時期を意味する。

殷王朝以後に青銅器時代に入り、甲骨文字が使用されたと報告されているが、文学の出現はこのあとにくる周代に待たねばならなかった。

紀元前六世紀に写定された『詩経』は、のちの中国の詩のすべてがこの巨大なる河から流れ出したものであると言わしめるほどの古代詩歌集である。この、韻文による感情表現、韻文による異議申し立ての最初の詞華集は、その後、文明の領域がひろがり、揚子江流域に出現した空想に満ちた華麗な詩篇の『楚辞』を導き出す。韻文の分野で先秦を代表する『詩経』と『楚辞』はしかし、先秦という時代のわくをはるかに越えて、いまでも中国の韻文文学を代表しているし、またこれからも代表するに相違ない。

三百年間も君臨した周王朝は、東の洛邑（ろくい）へ移ったあたりから權威を失墜し、統治力が弱まっ
てしまい、そして諸侯が乱戦する局面を迎える。はじめは千八百にもものぼる諸侯が抗争の結果、春秋時代には百四十までに減り、戦国時代には、齊、楚、燕、韓、趙、魏、秦の七カ国だけとなった。こうして、権力が弱まると文学が興る、という図式を絵にかいたように、諸子百家と



よばれる思想家が輩出したのである。

これら政治と密着しつつ現実を変革することをくわだてる百家争鳴時代の文献はすべて散文で書かれていて、およそ三十点ほど伝わっている。『管子』『孫子』『荀子』などの子書とよばれる一群の中で、思想の書でありながら文学的側面をもつものは、『論語』『孟子』『老子』『墨子』『韓非子』『莊子』などの言行録や、政論、哲学的著作である。史書の一群の中の『左伝』『国語』『戦国策』は、のちにくる散文文学の先駆としての位置にある。

先秦において、中国文学はすでに韻文と散文によってさまざまの表現技術を獲得し、且つ、その多様なスタイルは完成の域に達していたのである。

一方、この文学的成熟に似合わず、『詩経』のなかに叙事詩は少量しか見出せず、また神話の記録はきわめて断片的で、そしてこの時代には、戯曲の誕生をいまだみず、この点で、叙事詩をもつギリシャとは様相を異にし、戯曲をもたないインドやペルシャと同じ面をもつ。

キリスト誕生の、その前と後をはさむようにほぼ四百年の大漢帝国という時代は、前代の秦王朝がとった文化政策から或る教訓を汲みとり、書物を焼かずに、解釈で帝王に仕えるように転化するとともに、文人殺戮のかわりに手なずけて飼犬化し、帝国礼讃をさせたところから、司馬相如^{しはそうじよ}、楊雄、班固らに賦という長篇の韻文を生ませた。しかしこのような漢賦より今日でも強靱な生命力をもつものは、司馬遷の『史記』であることはいまさら贅言を要しないであろう。司馬遷の史書の、とくに「列伝」の部分は一段と文学の香気が高く、後世の小説によき影響をもたらした。他には、遅蒔きながら叙事詩が登場し、空白をいくぶんか埋めたのと、五言詩の興



起で陶淵明への橋渡しの役割りを果たしたこともあげることができる。ほかには、賈誼、王粲、蔡琰、孔融、諸葛亮、曹植、枚乗などがおり、これらの人物の文筆活動で、漢代の文学不振はいくぶん救われたといえる。

末期の大漢帝国は、黄巾の乱を契機に、やがて蜀、魏、呉という三つの国家に分裂し、この三国時代が終わると、西晋がはじまり、そして、五胡十六国、東晋、五胡の前秦、五胡の北魏、南北朝時代へと目まぐるしく変わってゆく。

竹林の七賢人で象徴する動乱の魏晋南北朝の中から一人をえらぶとなれば、陶淵明というところに落着くであろう。

陶淵明を偏愛する人は多いが、この結論は偏愛による結果ではなく、古代詩歌の集団創作の『詩経』から、最初の個人詩人屈原に進み、このとき第三のピークの陶淵明に到達したということである。生活と人生を見つめる詩人であり、じわじわとやってくる死を見つめる詩人であった。一方、創作よりも事実を記録する方が安全という見地から、名士のゴシップ集の志人、また同様の理由から超自然の霊異を書きしるす志怪、つまり怪談集のちの時代の小説に寄与する要素をもっている。

短かく、しかも一首しかないが、北朝民歌の「敕勒歌」は、少数民族の文学能力の非凡さを伝えるとともに、当時の翻訳の卓越さを知らせてくれている。

大分裂の局面にピリオドを打ったのは北朝の隋で、時は五八九年のことである。度のすぎた収奪などの失政の結果で、四十年足らずして天下を唐に明け渡さねばならない羽目にたちいた



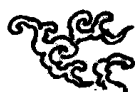
った。

異文化にも寛大な受容を示した唐という時代は、六一八年に華やかに開幕し、絶え間なく絢爛たる詩人文士を舞台に送り出した。中国文学、なかならず詩の発展の歴史的ドラマのクライマックスをみせてくれる。中国文学の花とよぶにふさわしいこの唐代の詩でも、まだ流派も形成されず、文学集団も結成されず、散発的で、個人的であるという性格からして、ドイツの宗教改革以後の文学のように、啓蒙主義、古典主義、ロマン主義、写実主義、自然主義、表現主義という分類分期の方式ではとらえにくく、一般には伝統的な四つの歴史的分期をもって対処するのである。

第一期は、七世紀の初唐——前期の齊、梁の空疎な詩風の延長と対決する陳子昂ちんすうきやうの出現は新しい始まりを予告するという意味をもつが、四傑を含めてこの時期の詩作で今でも生命力をもつのは、劉希夷りゅうきいの「代悲白頭翁」くらいではないかと思われる。

第二期は、八世紀前半の盛唐——李白、杜甫、王維、岑参しんさんとつづがそろい、それぞれに個性があり、それぞれの詩篇に風格がある。そうして、詩語の拡大、題材の多様化、さらに詩形の充実と詩法の精密化、韻律論の完成などの点は、のちの詩の発展にとって寄与するところが大きい。

第三期は、八世紀後半の中唐——前期を継続する大暦の十才子、韓愈、柳宗元、張籍はこの時期の選手である。なかには、白楽天の詩のように小説との接近という新しい傾向も看取されるのである。



第四期は、九世紀の晩唐——杜牧の平明、李商隱の纖細、李賀の鮮烈と、それぞれ唐詩に新しい音と色をもたらしたが、全体からみれば唐詩は終末にむかいつつあり、韻文の方は溫庭筠の詞、そして、伝奇とよばれる短篇小説が誕生し、主流は散文へ移行しつつあった。

唐王朝が失政のなかで崩壊するや、そのあとの九〇七年からはじまる五代十国という動乱の時代に入った。うたえる詞はこの時代の花形となり、李煜はこの道の第一人者となった。詞は韻文に活路を切りひらき、詩の新種を文学の世界に送りこんだのである。

宋代は、その前半の一・二七年までを北宋とよび、女真族の金国に降服して後、首都を杭州に移してから南宋とよぶ。蘇東坡は北宋、陸游は南宋、そして李清照は両方にまたがり、それぞれの政治、社会の氣象の相違が文学の上のニュアンスの相違となつてあらわれている。この三人は宋の文学の高さを代表している。詩と文という正統の文学のほか、詞が加えられ、柳永、辛棄疾のような専門の詞人まで出現し、後代には、宋の文藝を代表するジャンルとして、宋词とよびならわされるようになったほどである。

詩人の団体の詩社が結成されたこと、詩と詩人に関する評論の詩話が流行したことは詞の隆盛とともに評価できる。また、白話短篇小説の話本、長篇講談の平話の普及は、本格的小説の出現をうながす意味をもったものである。

この時代には、范仲淹、歐陽修、司馬光、王安石、晏殊、梅堯臣、黄庭堅、范成大、楊万里的仕事がときどき回顧される。

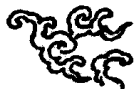
一二七九年に成立した元帝国は、モンゴル人の王朝である。この元代の文学は、元人雜劇、



またの名を元曲とよばれる戯曲の分野がずばぬけてすぐれている。戯曲の中心となる韻文の部分の曲と、会話の部分の白は、両方とも耳できいて分かるように文章語から脱却し、口頭語で書かれているのである。この文学言語の变革は、のちの明清の長篇小説のための地ならしの働きをした。

このあとの、一三六八年に成立した漢民族の明王朝も劇文学が盛んであった。この伝奇と称し文人の手になる長篇戯曲は、湯顯祖の名作「牡丹亭」をはじめとして、ほとんどの作品はいちように長すぎることによって散漫になり、また一般の観衆にとつてその文章は難解で、レゼ・ドラマの要素が強いという嫌いが否めない。詩の方は、高啓、袁宏道、文の方は李贄、帰有光たちが高い水準を示しながらも、明代の文学を代表するという榮譽は、やはり、聞いて分り、語るに適する、中国長篇小説の特徴をあますことなく發揮するあの『水滸伝』、また歴史物語から脱皮し、フィクションの文学空間を構築した『金瓶梅』にゆずらなければならなかった。中国の小説は『史記』、志人、志怪、伝奇、話本、平話という長い道のりを経てついにここまで辿りついたのであった。

次に、一六四四年に成立した満民族の清王朝も同じように、洪昇の「長生殿」、孔尚任の「桃花扇」などの伝奇、また呉偉業、納蘭性徳、王世禎、袁枚、龔自珍、柳亜子らの詩業、方苞、紀昀、焦循の文章と枚挙にいとまがないほどであるが、やはり文言の短篇小説『聊齋志異』や、白話の長篇小説『紅樓夢』がこの時代を代表する文学とよぶにふさわしい。散文という文体で、虚構のさまざまな人生をつくりあげて考えるということが普遍的となり顕在化されてきたので



ある。このような虚構の精神、また、創造的想像力は、『山海經』や『淮南子』の中に保存されている神話からも、また『莊子』の中の寓話からも見出されるのである。

清王朝が滅び、中華民国が生まれたのは一九一二年で、五年後の一九一七年に文学革命の狼煙があがった。在来の文学に対し、それ以後の文学を区別して新文学とよばれた。文学言語を白話におくことも、文学は人間と人生と世界を描くということも、とりたてて「新」と言うほどのことには当たらず、「新」とは、創造の触媒を欧米ソ連などの諸外国の文学に求めるといふ点と、反帝国主義、反封建主義とイデオロギーの導入という点にあった。五・四の前夜の一九一八年に書かれた魯迅の「狂人日記」がその形式と内容とで新文学の実績を示した。この記念碑的小説を書いて以来、世を去る一九三六年まで、魯迅はつねにこの新しい文学の中心でありつづけ、そして「阿Q正伝」という傑作を残したのである。この文学革命の時期には、胡適、周作人、瞿秋白、葉紹鈞、茅盾、歐陽予倩、郁達夫、郭沫若、田漢、冰心たちがいた。

中国左翼作家聯盟の結成から抗日戦争までの間に、茅盾は「子夜」、老舍は「駱駝祥子」、巴金は「家」をあいっいで発表、新文学は長篇の時代に入ったのである。抗日戦争後、重慶入りした郭沫若は「屈原」を書き、茅盾は「腐蚀」、巴金は「憩園」、陳白塵は「陞官図」、曹禺は「蜕变」、老舍は「四世同堂」を書き、反ファシズムの作品が多い。一方延安では、文芸座談会のあと、趙樹理の「小二黑結婚」、李季的「王貴与李香香」、集団創作の「白毛女」など大衆路線の作品が多くなっていた。この頃、文学は政治に従属するという政治第一主義が確立したのである。

抗日戦争が終結して間もなく解放戦争が起こり、その結果、中華民国は基本的に消滅し、一



九四九年、中華人民共和國が成立する直前、第一次全中国文芸工作者代表大会が開催され、中国の文学は共産党がリードし、中国人民に服務するものと位置づけられ、毛沢東文芸路線のレールの上にのったのである。五・四から全中国文芸工作者代表大会開催までの時期の文学を、現代文学の範囲に属するとみるのが中国では通説となっている。

新中国成立の年から、プロレタリアート文化大革命が勃発するまでの建国後の十七年間には、土地改革、五反運動、抗美援朝、百家争鳴、反右派、人民公社化、ベトナム援助というように、運動につぐ運動がくりひろげられ、無論作家たちもその中であつて多くの時間と多くのエネルギーを費やし、そうして、それぞれの時期の政治にマッチするテーマの作品を書いた。

この十七年間の成果として、趙樹理の「三里湾」、曲波の「林海雪原」、周而复の「上海的早晨」、柳青の「創業史」などの長篇小説、郭沫若の「蔡文姬」、田漢の「閨閨卿」、老舍の「茶馆」などの戯曲のほか、梁斌、艾蕪、歐陽山、李英儒、馬烽、王汶石、周立波らが活躍した。なかでも、民族的風格をそなえ、中国の戯曲のレベルを新しい地平にひきあげた老舍の「茶馆」はとりわけ大きい存在である。

建国後の十七年と文革中、及び文革後から今にいたるまでの期間を、中国では当代文学として扱うことになっている。当代とは、コンテンポラリー、即ち同時代のことである。

一九六六年に文化大革命が起り、それが終止するまでの十年間は、作家が一人、革命模範劇八本のみが文壇を独占し、数多くの文筆家が殺害され、閉じこめられ、また休筆を余儀なくされ、その結果、文学の創作はゼロに等しく、長い中国文学史の上でも、その弾圧の徹底の度合



い、範圍の広さ、空白の長さは他のどの時代にも類例がみられないのである。

一九七六年、文革に終止符が打たれて以後、ある種の教条の呪縛からの解放の希求が文学の上にもあらわれ、文革中の傷痕を描く盧新華、劉心武、王亞平、宗福先などの新人が生まれた。この時期の、王蒙、吳強、陳世旭、劉賓雁、白樺、鄧友梅、魯彥周、諶容、蔣子龍、徐遲らの仕事が目につく。しかし、なによりも、重要な意味をもつのは、巴金の随想録であろう。自己の内面を深くみつめようとするこれらのエッセー群は、中国の文学を新しい次元に前進させる要素をもっていると考えるからである。



中国文学館詩経から巴金……黎波

目次

序説——vi

◆——春秋戦国時代——前七七〇年—前二二一年

神々の物語——2

焼き捨てられた詞華集——10

散文の森—諸子百家——18

戦国時代の歴史散文——25

屈原の悲歌——32

荘子の寓話——39

◆——漢魏六朝時代——前二〇七年—五八九年

司馬遷の『史記』——46

漢代の詩篇——53

女性讃歌の叙事詩—楽府——61



陶淵明の詩と文——70

草原の牧歌——北朝民歌——78

魏晉南北朝の小説の芽——85

◆ 唐代——六一八年—九〇七年

唐詩——その序曲〔唐詩Ⅰ〕——94

山水詩、辺塞詩など〔唐詩Ⅱ〕——101

いくさの詩〔唐詩Ⅲ〕——108

黄鶴楼をめぐる詩篇〔唐詩Ⅳ〕——115

李白の酒の詩——上〔唐詩Ⅴ〕——122

李白の酒の詩——下〔唐詩Ⅵ〕——130

杜甫の戦乱詩——上〔唐詩Ⅶ〕——138

杜甫の戦乱詩——下〔唐詩Ⅷ〕——145

白楽天の諷諭詩〔唐詩Ⅸ〕——152

韓愈、張繼たち〔唐詩Ⅹ〕——159

鬼才がうたう〔唐詩Ⅺ〕——167

唐詩——その終章〔唐詩Ⅻ〕——175

柳宗元の小説的な作品群——182

